

国別研修／モザンビーク「教員養成校における現職教員指導法改善」の フォローアップ報告

香西武, 石坂広樹

鳴門教育大学教員教育国際協力センター

1. 目的

本件フォローアップは、国別研修／モザンビーク「教員養成校における現職教員指導法改善」の研修員の現地での活動状況について調査することを目的としている。また、来年度以降の研修のニーズや技術協力の可能性などについて取りまとめることも目的とした。

2. 日程

- 3月1日 ナンプラ到着
- 3月2日 ナンプラ州教育事務所訪問
ナンプラ教員養成校 (IFP)・同附属小学校訪問
ナンプラ市内小学校訪問
- 3月3日 ナンプラ IFP・同附属小学校訪問
ナンプラ市内中等教育校訪問
- 3月4日 マプト州教育事務所訪問
マトラ IFP・同附属小学校訪問
- 3月5日 マプト教育大学理数学部訪問
マプト市内小学校訪問
教育大臣表敬訪問
- 3月6日 教育省教員養成局長
マプト市内小学校訪問
モザンビーク JICA 事務所訪問
在モザンビーク日本大使館訪問

3. 活動及び調査報告

- (1) 本件研修員の実施した理数科教育に係る授業の実施、及び授業観察・指導の様子について調査を行ったところ、分かったことは以下の通りである。
- (2) ナンプラ IFP で実施した研修員による授業を観察したところ、研修成果を生かして学生の考えを引き出しながら授業を行っており、以前に観察した授

業が改善されていることが確認できた。

- (3) マトラ IFP では、研修員による附属小学校の理数科授業の観察・指導の様子等について分析を行った。研修の成果を生かした結果、授業のアドバイスの面において、授業者のよいところをしっかりと認め、改善点を指摘するなど、授業者のモチベーションを高めることに留意できていた。また、研修員は、児童の目線に立ったうえで、授業者が発問等できていたかどうかについて適切なアドバイスをすることができており、研修で学んだ児童の学習状況の適切な把握及び対応について十分に理解していることが確認された。こうした授業観察・指導は今後の授業研究におけるアドバイザーとしての役割を十分に果たせるものと思われる。
- (4) TIMSS の算数問題 (4 年生用) を使ったテストを IFP の学生約 150 名 (1 年生・2 年生)、公立小学校の児童約 450 名 (4 年生・6 年生) に実施した。統計的な結果については後日の分析を待つ必要があるが、おおむね、IFP の学生は 50% 強、公立小学校の 4 年生は約 10%、6 年生は 30% 程度の解答率だと予想される。特に苦手な分野として予想されるのは、分数・図形全般である。ただし、計算問題についても 4 年生の多くの児童が指を使った数の数え方、紙に棒線を書いた数の数え方を用いて 3 桁以上の足し算や 2 桁の掛け算を行っている姿が複数確認された。
- (5) また、同じ問題に対し、IFP 教師や小学校の教師に対し児童の回答率について予想してもらったが、概ね、実際の解答率より高く予想していることが確認された。この点から、教師と児童との間に学力に関する認識・現実の差があることが分かった。
- (6) テスト結果から小学校の児童の算数の学力の低さが確認されたが、要因としては、①そもそもポルトガル語の習得がまだ途上にあること、②算数授業において文章問題が取り扱われていないこと (国語

の読解力に課題があること), ③算数授業において, 計算問題以外について扱うことが少ないこと, ④算数授業において10進位取り法がきちんと学習されておらず, 計算問題も数を数えることで解くことが習慣づいていること, ⑤ノートは板書を写すことのみであることなどが考えられる。

- (7) 授業の中で教師が知識を聞く場面はあったが, 児童の考えを聞く場面が少なかった。授業が知識を与えることに終始している。例えば理科の授業では, 様々な用語の定義について教師が前提として児童に示し与えてしまうことから, 児童の考える余地が少なくなってしまう。黒板に書いた定義を児童にノートに写させるものの, 読み合わせしたり確認したりすることがなかった。
- (8) 周りのものを生物・非生物に分類する理科の授業があったが, 分類されたもの(知識)を覚えさせることはあっても, 本来の目標である物事を分類する能力を育てることはしておらず, 理科の概念形成や, 理科の概念どうしの関係性についての理解などができていない可能性が高い。
- (9) 授業の中で, 学習内容について児童が理解しているかどうかを確認することがなかった。例えば, 授業後に授業者の教師に「何%の児童が理解できたと思いますか」と聞いたところ, 「わからない」と答えてしまうことがあった。児童の理解の進み具合・つまづき具合について理解・把握しないで授業を進めている可能性がある。
- (10) 板書について, 授業はじめに黒板に学校名・日付・教科名・単元名・テーマ(めあて)を教師が書く場面が多くみられた。テーマ以外については書く必要はなく, スペースと時間を無駄にしている。
- (11) 実験や観察を実施している授業は非常に少なかった。
- (12) 構成主義が小学校のカリキュラム(指導指針)で述べられているものの, 児童の素朴概念を問う場面

は全くなかった。

4. 今後の課題・展望

- (1) IFP 及び附属小学校は各地域のモデル校としての役割が期待されているところ, 今後, 授業の質の改善を考える時, IFP を中心とした活動を考える必要がある。よって, 次のような取り組みが提案できる。
- (2) IFP 教師とともに, IFP のモジュールと小学校のカリキュラム・教科書・指導書などの整合性について, また, 理数科教育の学習内容の順序整理・組織化を行う必要がある。
- (3) IFP の教師に対する教材開発に係る技術支援が必要である。例えば数学であれば, 数の数え方・10進位取り法, 分数, 図形全般などが学力テストの結果から課題が多きものと予想される場所, IFP 教師が授業にて紹介できるような教材の開発が必要となる。また, それをもって, IFP 教師が附属小学校の教師にもアドバイスできることが期待される。
- (4) IFP の教師の教授法について, 特に理科教育においては「実験」の実践が乏しいところ, IFP の授業に「実験」を取り入れる必要がある。
- (5) IFP 附属小学校において「授業公開・研究会」を毎年1回開催し, IFP 附属小学校がモデル授業を公開し, 地域の小学校教師も参加することで授業の質の改善に貢献することが考えられる。
- (6) 各 IFP の理数科教師が授業改善の研究ができるような「理数科教育研究会」が設置され, 自主的な研究が全国各地で行われるようになることが望まれる。
- (7) IFP 教師が, 小学校で教えるためには教科書に掲載されている内容をさらに深く知る必要があることを認識し, それに対応する授業を実施することが必要である。